



宮本商産株式会社 旧本社ビル

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tonohide Eguchi

毎 年夏休みは同行者の里帰りに付き添って帯広にいく。今年は初日から三六度を超える猛暑に見舞われたが、その後はさわやかな気候に恵まれた。そんな日の夕べに、宮本商産株が旧本社ビルで開催するジャズコンサートに招待された。

宮本商産株は、帯広を拠点とする総合商社であり、明治三十六（一九〇三）年の創業から一四四年の歴史を誇る。旧本社ビルは帯広駅北口前のメイン通りをまっすぐ進んで、一キロほどの角地に建つ木骨レンガ造二階建てのビルで、赤レンガに白い花崗岩の帯を廻らしている。戦前の帯広の繁栄を伝える良質な建築として評価され、今年の三月に登録有形文化財となり、今回のジャズコンサートは、記念イベントとして開催された。

さて、真正面から旧本社ビルを眺めると、左右対称で台形の屋根を持ち、コンパクトにまとまった可愛らしい赤レンガの建築で、バージニア・リー・バートンの絵本「ちいさいおうち」を思い浮かべた。地元でも「赤れんが」の愛称で親しまれているという。さて、この旧本社ビルだが、設計者が辰野金吾ではないかと噂されている。辰野金吾は、日本の近代建築黎明期を支えた建築家であり、東京駅や日本銀行本店の設計で知られ、彼が得意とした意匠に「辰

野式」と呼ばれるものがある。赤レンガに白い花崗岩を帯状に廻らした赤白ツートンが最も目立つ特徴だ。旧本社ビルもこれに該当する。

『帯広市古建築調査書Ⅹ 宮本商産』には、「尚、富山市に見られる、レンガ造りの建物（イギリスの建築家コンドルに師事した辰野金吾（一八五四―一九一九）の設計）に、似ているのも、大きな特色かもしれない」と書かれており、このようなことから、辰野設計説がささやかれるようになったのだろう。旧本社ビルは大正七（一九一八）年に着工し、翌八年に完成と推測されている。そして、辰野は大正八年に亡くなっているのも、もし彼が手掛けたとすれば、最晩年の作品となる。しかし、実際はどうだろうか。

「辰野式」の特徴は、赤レンガと花崗岩の組合せだけではない。二つ目の特徴は街の角地を選び建物を目立たせること。三つ目は、外観を美しく見せるためレンガの積み方を小口面のみが見える小口積みとすること。ここまでは、旧本社ビルに該当する。

続いて四つ目はゴシック様式と古典様式の混淆。五つ目は、建物の隅に設けられるポリュームのある塔屋。六つ目が、建築家の藤森照信氏が「さまざまな形のドームや塔を屋根いっぱいに軍艦巻きのごとく盛り付けた」と評する賑やかな屋根の並び。これ

らは旧本社ビルには当てはまらない。

宮本商産株の旧本社ビルは、すっきりとしたレンガ建築であり、「辰野式」のようなアクの強さがなく、私は建築史家ではないので、正否の判断をくだすつもりはないが、たとえ辰野金吾の作品ではなくとも、この建築の価値とは何ら関係がない。登録有形文化財となったことをいい機会とし、帯広市街のシンボルとしていつまでも存続させて欲しいと願う。



宮本商産株式会社 旧本社ビル

[交通] JR帯広駅北口より徒歩約15分